

鶴見川(砂摩川)流域の中世 その一 鎌倉時代

中西望介

はじめに

地域—生活・生産の場

鶴見川流域(砂摩川)流域の地域史を模索 — 上から下への作られる歴史ではない、下からの動きと、上からの動き

〇〇寺」という地名 — 王禪寺・真光寺・万福寺・寺家(寺領を意味する)がなぜ多いのだろうか? — 江戸時代以前の歴史を反映しているのだろうか?

鎌倉道の伝承が多く残る地域 — 鎌倉の後北月代 鎌倉上中下道が通る — 鎌倉(江戸)の主として掌握して置きたい地域

地形
丘陵と谷戸

鎌倉時代と
1 中小武士の立場から見ることにより、
早くから種々の垣内の開発が進んだ地域
大きな勢力が育ちにくい — 証の都賀覚、花園が存在しない、国領

(1) 中小武士
鴨志田十郎の事例 — 資料「吾妻鏡」建久元年(一一九〇)十一月七日条 — No.2 No.3
鴨志田郷 (寺家・鴨志田付近)

建久元年と同六年(一一九五)に二度、頼朝に従い上洛 — その後「吾妻鏡」から記事消える
永仁年間(一一九三〜九九)と思われる、武蔵国留守所代阿聖・左兵衛尉実長連署者故、によると
鴨志田氏の果たすべき御家人役は隣郷の思田氏が果たしている、思田氏は金沢氏の被官

被官化する道 (後述)
他の所領で発展する道

再び資料 — 鶴見川流域の武士と抽出 — No.3 左下

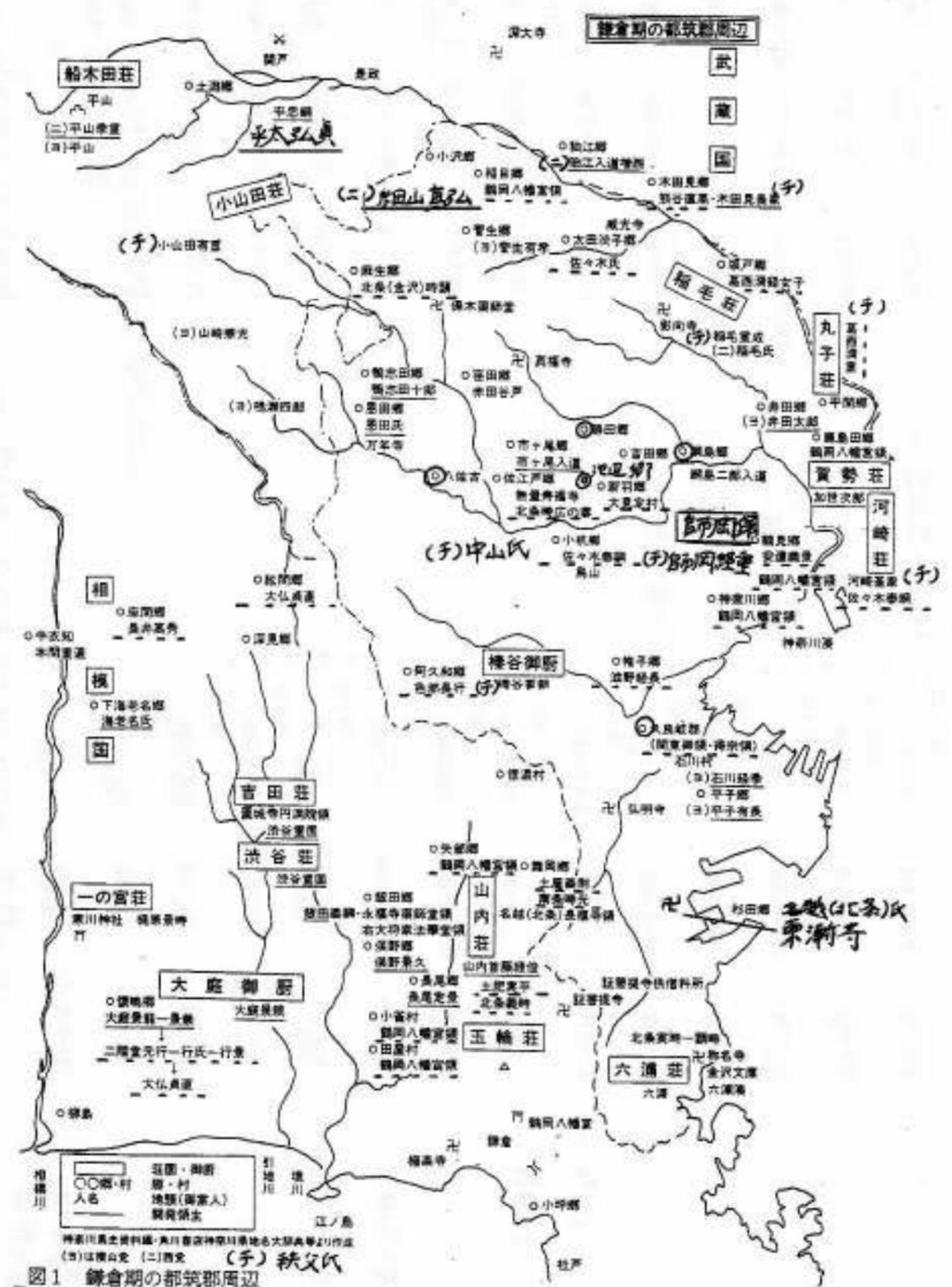


図1 鎌倉期の都筑郡周辺 (「横浜市緑区史通史編」中西作図と加筆補正)

人名 給子とて入部した領主 → ◎ 関東御領

真光寺・宝利蔵の由、上杉清子一寺
西覚 寺の由、由(の)存在はわかっている。資料がたまたま残っている
横山覚 相模川沿いに足利氏の子がたつた
中小鎌倉人の住むべき道は、
河越 横山、船毛、小山田、鎌倉
横山覚 相模川沿いに足利氏の子がたつた

吾妻鏡 建久元年十一月七日条

次に先陣、シメトセ 222
鳥山次郎重忠 馬場重忠の甲を著け、童子一
次に先陣の騎兵、三騎之に別す、一騎、別は強野持一騎、馬、腰巻、行儀、又小舟人重忠
を上げ、社前を著ひ、行儀を著けて社前に在り、其外無事と共せず

西見、横山覚の武士や
鴨志田氏など中小武士の存在と

確認する

岩波文庫本
吾妻鏡より

- 二番 山口小七郎 熊谷小次郎 小倉野三
- 三番 下河邊四郎 藤谷彌五郎 熊谷又次郎
- 四番 仙波次郎 藤野小次郎 小越四郎
- 五番 小河次郎(私本) 市小七郎 中村四郎
- 六番 加治次郎 勅使河原三郎 大曾四郎
- 七番 平山小太郎(二) 藤田小次郎 古郡次郎
- 八番 大井四郎 高麗太郎 鴨志田十郎
- 九番 馬場次郎 八嶋六郎 多加谷小三郎
- 十番 阿加田澤小太郎 志村小太郎 山口次郎兵衛尉
- 十一番 武次郎 中村七郎 中村五郎
- 十二番 郡筑三郎 小村三郎 石河六郎
- 十三番 庄太郎三郎 四方田三郎 淺羽小三郎
- 十四番 岡崎平四郎 塩谷六郎 曾我小太郎
- 十五番 原小三郎 佐野又太郎 藤田兵衛尉
- 十六番 阿保六郎 河勾三郎 河勾七郎三郎
- 十七番 坂田三郎 春日小次郎 阿佐美太郎
- 十八番 三尾谷十郎 河原小三郎 沼田太郎
- 十九番 金子小太郎 岡部小次郎 吉谷小次郎
- 二十番 小河次郎 小宮七郎 戸村小三郎
- 廿一番 土肥次郎 佐賀六郎 江戸七郎
- 廿二番 寺尾太郎 中野小太郎 熊谷小太郎
- 廿三番 彌津次郎 中野五郎 小諸太郎次郎
- 廿四番 彌津小次郎 志賀七郎 笠原高六
- 廿五番 嶋橋三郎 今堀三郎 小諸小太郎
- 廿六番 土肥荒次郎 藤澤三郎 二宮小太郎
- 廿七番 山名小太郎 新田藏人 徳河三郎
- 廿八番 武田太郎 遠江四郎 佐竹別當
- 廿九番 武田兵衛尉 姓持守 信濃三郎
- 三十番 淺利冠者 奈胡藏人 伊豆守
- 卅一番

鴨志田郷の領主
建久二年銘石碑の
この一撰の長巻路
邊りか
都筑郡の領主カ

- 卅二番 工藤小次郎 佐賀五郎 田上六郎
- 卅三番 藤田兵衛尉 藤橋三郎 小栗次郎
- 卅四番 藤澤次郎 阿保五郎 伊佐三郎
- 卅五番 中山四郎 中山五郎 江戸四郎
- 卅六番 加世次郎 塩谷三郎 山田四郎
- 卅七番 中澤兵衛尉 海老名兵衛尉 藤橋兵衛尉
- 卅八番 中村兵衛尉 岡部平六 猪俣平六
- 卅九番 駒江平四郎(二) 西小大夫(二) 高間三郎
- 四十番 所六郎 武藤小次郎 藤橋八郎
- 四十一番 佐々木五郎 糟江三郎 岡部右馬允
- 四十二番 堀四郎 海老名次郎 新田六郎
- 四十三番 葛西十郎 伊東三郎 浦野太郎
- 四十四番 小澤三郎 藤河彌五郎 横山三郎
- 四十五番 藤橋八郎 藤橋太 和田小次郎
- 四十六番 山内先次郎 佐々木三郎 宮王丸
- 四十七番 右衛門兵衛尉 尾藤次 中橋平六
- 四十八番 三浦十郎太郎 後藤内太郎 比企藤次
- 四十九番 小山四郎 右衛門太郎 岡部興一太郎
- 五十番 藤谷藤太 野平右馬允 九郎藤次
- 五十一番 多氣太郎 小平太 宇佐美小平次
- 五十二番 波多野小次郎 新田四郎 机井八郎
- 五十三番 小野寺太郎 足利七郎四郎 足利七郎五郎
- 五十四番 佐賀四郎 足利七郎太郎 横山太郎
- 五十五番 堀原兵衛尉 和田小太郎 宇治藏人三郎
- 五十六番 堀原左衛門尉 宇佐美三郎 賀嶋藏人次郎
- 五十七番 小山田四郎 三浦平六 小山田五郎
- 五十八番 和田三郎 堀藤次 土屋兵衛尉
- 五十九番 千葉新介 氏家太郎 千葉平次
- 六十番 小山田三郎 北條小四郎 小山兵衛尉

一 秋父氏 小机付近領主
加世仕の領主

一 西見

一 猪俣覚

- 廿四番 彌津次郎 中野五郎 小諸太郎次郎
- 廿五番 嶋橋三郎 今堀三郎 小諸小太郎
- 廿六番 土肥荒次郎 藤澤三郎 二宮小太郎
- 廿七番 山名小太郎 新田藏人 徳河三郎
- 廿八番 武田太郎 遠江四郎 佐竹別當
- 廿九番 武田兵衛尉 姓持守 信濃三郎
- 三十番 淺利冠者 奈胡藏人 伊豆守
- 卅一番

一門
受領千人

- 次に御引馬一疋
- 次に御小具足持一疋
- 次に御弓袋一疋
- 次に御甲著一疋
- 次に御甲著一疋

一 秋父氏 稲毛重成

- 卅二番 工藤小次郎 佐賀五郎 田上六郎
- 卅三番 藤田兵衛尉 藤橋三郎 小栗次郎
- 卅四番 藤澤次郎 阿保五郎 伊佐三郎
- 卅五番 中山四郎 中山五郎 江戸四郎
- 卅六番 加世次郎 塩谷三郎 山田四郎
- 卅七番 中澤兵衛尉 海老名兵衛尉 藤橋兵衛尉
- 卅八番 中村兵衛尉 岡部平六 猪俣平六
- 卅九番 駒江平四郎(二) 西小大夫(二) 高間三郎
- 四十番 所六郎 武藤小次郎 藤橋八郎
- 四十一番 佐々木五郎 糟江三郎 岡部右馬允
- 四十二番 堀四郎 海老名次郎 新田六郎
- 四十三番 葛西十郎 伊東三郎 浦野太郎
- 四十四番 小澤三郎 藤河彌五郎 横山三郎
- 四十五番 藤橋八郎 藤橋太 和田小次郎
- 四十六番 山内先次郎 佐々木三郎 宮王丸
- 四十七番 右衛門兵衛尉 尾藤次 中橋平六
- 四十八番 三浦十郎太郎 後藤内太郎 比企藤次
- 四十九番 小山四郎 右衛門太郎 岡部興一太郎
- 五十番 藤谷藤太 野平右馬允 九郎藤次
- 五十一番 多氣太郎 小平太 宇佐美小平次
- 五十二番 波多野小次郎 新田四郎 机井八郎
- 五十三番 小野寺太郎 足利七郎四郎 足利七郎五郎
- 五十四番 佐賀四郎 足利七郎太郎 横山太郎
- 五十五番 堀原兵衛尉 和田小太郎 宇治藏人三郎
- 五十六番 堀原左衛門尉 宇佐美三郎 賀嶋藏人次郎
- 五十七番 小山田四郎 三浦平六 小山田五郎
- 五十八番 和田三郎 堀藤次 土屋兵衛尉
- 五十九番 千葉新介 氏家太郎 千葉平次
- 六十番 小山田三郎 北條小四郎 小山兵衛尉

一 源頼朝

304 次に水干を著ぐる輩、野原を
 一番 三浦加 伊東四郎
 二番 同前 加藤次
 三番 三浦十郎 入田太郎
 四番 河内五郎 入田太郎
 五番 三浦介 葛西三郎
 足立右馬允 工藤左衛門尉
 次に後陣の諸兵、

305 月一十年元久
 二番 梶原刑部丞 鎌田太郎
 三番 大井次郎 大河戸太郎
 四番 人見小三郎 多々良四郎
 五番 藤嶋守 江戸太郎
 六番 金子十郎 小越右馬允
 七番 吉香次郎 大河戸次郎
 八番 藤老名四郎 宇津兼三郎
 九番 河村三郎 阿坂余三
 十番 下河邊庄司 眞壁六郎

306 月一十年元久
 十一番 大胡太郎 藤智次郎
 十二番 毛利三郎 駿河守
 十三番 泉八郎 豊後守
 十四番 村上左衛門尉 村上七郎
 十五番 村上右馬助 同判官代
 十六番 品河太郎 高田太郎
 十七番 近間太郎 中郡六郎太郎
 十八番 秩父平太 櫻栖太郎
 十九番 沼田太郎 志村三郎
 二十番 大井五郎 岡村太郎
 二十一番 大胡太郎 櫻栖四郎
 二十二番 大河原次郎 小代八郎
 二十三番 三宮次郎 上田橋八郎
 二十四番 淺羽五郎 白井余一
 二十五番 山上太郎 武者次郎
 二十六番 井田太郎 井田次郎

307 月一十年元久
 武佐五郎
 高屋太郎
 天羽次郎
 小林次郎
 武佐五郎

後陣の諸兵

権守 国衛左官人

門葉

大胡太郎 廿二番と重複
上野 藤原足利氏

門葉 受領

都筑郡の領主

308 廿七番 目黒彌五郎 菅河四郎
 廿八番 鹿嶋三郎 廣澤余三
 廿九番 上野權三郎 大井四郎
 三十番 塩部四郎 同小太郎
 卅一番 小見野四郎 庄四郎
 卅二番 片瀬平五 那須三郎
 卅三番 鹽谷太郎 毛利田次郎
 卅四番 淺羽三郎 新野太郎
 卅五番 高橋太郎 印東四郎
 卅六番 高橋太郎 印東四郎
 卅七番 高橋太郎 須田小大夫
 卅八番 宮田太郎 同館次郎
 卅九番 藤南太郎 藤九郎
 四十番 別府太郎 奈良五郎
 四十一番 岡部六野太 龍瀬三郎
 四十二番 玉井四郎 岡部小三郎
 四十三番 榎木四郎 忍三郎

309 月一十年元久
 寺尾三郎太郎
 加治太郎
 道後小次郎
 江田小次郎
 山口小次郎

310 四十三番 和田五郎 青木丹五
 四十四番 榎澤木平六 加治太郎
 四十五番 多々良七郎 眞下太郎
 四十六番 高井太郎 道智次郎
 次に後陣、
 勘解由判官
 榎原平三 其後数十箇
 千葉介 千原朝時等

源頼朝の上洛軍の行列——パレード 後白河法皇をほじり
 都の人々と意識した 壮大な軍事パレード
 先陣↑先陣の諸兵(鎧・冑と着した)↑
 一門も諸兵として参加↑頼朝↑水干を着した
 親衛隊↑後陣の諸兵↑後陣
 警護 ○印は弓の名手 前後を弓の名手で固める。

後陣 榎原景時 千葉常胤

有考 菅生太郎 (横) 菅生卿(平瀬川、五段日川流域の谷戸、丘陵 鎌倉中道が通る)

人名 ↓ 夕摩川・鶴見川流域の領主(武士)

鴨志田十郎、都筑平太、同三郎など都筑郡の武士

小山太郎有考など横山覚の武士 — 横山権守は左官人

駒江千四郎、西小大夫など 西覚の武士

江戸・中山・小山田など秩父一族の武士 — 小山田、島山の

位置に注目

(2) 中小武士 平太弘貞の事例

養和元年四月二十日、このころ、稲毛重成、所領のこと
で源頼朝の怒りをうけ、罷居する。

18 [吾妻鏡] 第二 養和元年四月

廿日、乙丑、小山田三郎重成、聊背御意之間、成怖畏懼
居、是以武藏国多摩郡内吉富、并一言・蓮光寺等、注加
所領之内、去年東国御家人安堵本領之時、同賜御下文訖、
而為平太弘貞領所之旨、捧申狀之間、札明之処無相違、
仍所被付弘貞也、

(読み下し)

二十日、乙丑、小山田三郎重成、いささか御意に背くの間、怖
畏を成し懼居す、これ武藏国多摩郡のうち吉富、并びに一言・
蓮光寺などをもって、所領のうち注し加え、去んぬる年東国
御家人に本領を安堵するのとき、同じく御下文を賜わり訖わ
んぬ、しかるに平太弘貞の領所たるの旨、申状を捧ぐるの
間、札明するの処相違なし、仍って弘貞に付けらるる所なり、

(二) 西党の武士団の所領

地名 → 稲毛重成の所領
地名 → 平太弘貞の所領



資料2「吾妻鏡」養和元年(一一八一)四月二十日条

小山田三郎重成、稲毛重成と記されていない事、頭つかたすみに留めておく、
他人の所領を、自分の所領のうちに注し加える、こんな事が出来た、
重成個人の資質(欲深)に還元しない、

- 何かの権利を主張できる立場?
- 広域に設定できる(小沢郷に隣接している)
- 国衙左方の権力を背景に強引に取り込む

平太弘貞の所領

- 吉富・一言・蓮光寺とは、左図参照
- 関戸・渡河点 鎌倉上道が通る交通要衝
- 一言宮、武蔵国一言 小野神社 国衙の管理

小山田三郎重成

重成は將軍から御下文を賜っている、上級権力の承認を得て所領に取り込む
平太弘貞とは、どの様な人物か、
小沢郷に隣接している
小沢郷に取込まれている可能性

有力武士団 秩父平氏と中小武士団との対立

細山氏の名の地 細山(村)も 小沢郷に取り込まれている可能性
細山二郎実久
書生職
稲毛重成より一世代上の人物、早くから細山を開発

(4) 中小武士

稲毛五郎の事例

白山重忠の乱に因連して
稲毛重成・榛谷重朝も討れ
た。稲毛左の(地頭職)所領
は没収されたと考えられる。

西党系図には、稲毛五郎が
見える。＊傍証、新田若松文書

稲毛地域を開発した。秩父氏は
根拠家と連携して荘園化した。

西党武士団の分布



『日野史』通史編より

参考資料 元久二年(一一九五)

元久二年十一月四日、北条政子、稲毛重成の外孫被小路
節季の娘を猶子とする。源実朝、節季の娘に重成の遺領
小沢郷を与える。

53 [吾妻鏡] 第十八 元久二年十一月

四日、丙戌、晴、入夜、被小路節季被妻元御台所御亭、
可為御猶子之儀也、武蔵国小沢郷、稲毛入道可被知行之
由、被仰云々、

稲毛重成と稲毛左の関係を切詰る
直接の史料はない

小括

西党(国衙左方官人)が多摩地方の開発を進めた。
秩父平氏小山田氏(国衙左方官人)が根拠家・伊勢神宮・秩父政権の
上級権力を背景に一層広範な開拓を、先に開発をすす
めていた西党武士の連携をしながら、に開発した
土地を取り込んでいった。→連携・利害の調整・対立

